



校長室だより

令和6年度

1月27日

NO. 43

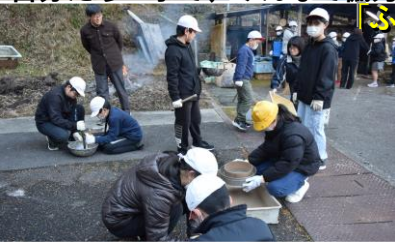
秦梨の里に染み入る、伝統の炭焼きの香り、思い...



自分たちの手で、みんなで協力して行う「ふるさと学習」



秦梨の里にあふれる炭焼きの煙、香り



山仕事サポーターの皆さん、ありがとうございます。



一人ひとり窯に木を入れました



秦梨の炭焼き窯から濃白の煙が立ち上ります。煙は冬の寒空に次第に溶け込み、ここにこの山や学校に、そして秦梨の里に広がっていきます。山の木々の隙間より差し込む日差しは、漂う煙を反射し、より鮮明に輝きます。子供たちの「きれい」の歓声が、冷えた山里を温かく優しくします。きっとこの景色を、昔の人も見ていたことでしょう。窯で燃え盛る炎は揺らめき、そして心地よい音を立て、今も昔も私たちに安らぎを与えてくれます。こうして昔から、生活の中で、様々な感性が育まれてきたのでしょうか。愛媛県で発見された日本最古の炭は、三万年前のもの。太古の昔から人々は炭を使い、五年生の国語に出てくる「枕草子」に、「いと寒きに（中略）炭もてわたるもいとつきづきし」とあるように、張り詰めたあわただしい早朝の景色に、炭は欠かせないものでした。秦梨炭焼き窯の看板に描かれる「鬼滅の刃」の竈門炭治郎の生きた大正時代や、明治から戦前にかけて、炭は料理や暖など、やはりいつも生活の中心にあったことでしょう。秦梨の多くの家の山でも炭が作られていたと聞きました。切り倒した木は、重くて運べないので、軽くて長持ちする炭にして運んだと川澄さんも言ってみえました。さらに木を切ることで日差しも入り、山は潤い里山も守られ、まさにSGD, sだったといえます。そんな当たり前にあった炭は、簡単に作れるものではありません。山のサポーター先生に教えてもらい、子供たちで木を入れ、自分たちで作った粘土で窯をふさぎ、そして火を入れ、何時間もかけて、やっと炭は姿を現します。その出来は毎年、違います。今年の炭の出来を、子供たちも楽しみにしています。秦梨の柱のある「ふるさと学習」では、こうした手間や苦勞、昔の人の知恵そして楽しみがあることを学び、それが、服に染み付いた煙のおいのように、子供の心にも染み込んでいくことを望みます。

○山仕事サポーターの鈴木宜行さん、川澄義久さん、ご指導ありがとうございます。28日には窯出しの予定です。改めてお世話になります。よろしく願いいたします。今後は、さらに多くの方に「炭焼き」についても、知っていただけるとよいと考えています。